わたしが吸血鬼のごはん！

はなぺ*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしが吸血鬼のごはん！

【Ｎコード】

Ｎ１４４４Ｚ

【作者名】

はなぺ＊

【あらすじ】

立花花。中学1年生。夢は漫画家！　でも絵はだいぶ個性的……。数年前、お父さんが海外旅行のお土産だよ～と見せてくれたのは、え？　吸血鬼！？　花と周りのちょっと変わった人達との日常話。

さいしょのさいしょ

ふんふんふ～ん♪　むふふふふ～ん♪
かきかき。うん、いいかもっ！

「できた！」

私は原稿用紙を持ち上げながら隅々まで見る。
ふわー。可愛いかも～。今までで1番上手く描けた気がする！

「妹よ？　何を自慢げに見上げておるのじゃ？」

「わっ！　お兄ちゃん！　いきなり何？　てか、気配無しに部屋に入ってこないで！」

「ほうほう。兄としては、隣の部屋からやけに機嫌のよさそうな鼻歌が聞こえてきたので、ちょっと偵察にな」

自分の右手を顔にかざしながらそう言うお兄ちゃん。かっこつけてるつもりなのか、よくそのポーズをしてる。

「偵察って何？　どうでもいいでしょ！　出て行って」

「ふむふむ、これが上出来か？」

「ああ！　返して返して！」

突然素早い動きで私のそばに来たと思ったら、持っていた原稿用紙を奪われてしまった。

「ははは！　我が妹ながら傑作だ！　まったくもって素晴らしすぎる！　笑が止まらんぞ！」

そのままがはがは笑い出す。もー、だから嫌だったのにい！

「あー、笑った笑った。花はとんでもない才能があるな、人を笑わす」

「ほっといて！　私をこれ以上傷つけたくなかったら出て行って！」

「ちょっと、洋うるさいんだけど……。ん、なに2人でやってるの？」

「姉さんちょうどいい。これ見てみてよ」

「あー！　お兄ちゃん！」

「んー、どれどれ……。ぶっ！　ははっ、なにこれ最高！　ははっ！」

途中で部屋にやってきたお姉ちゃんまで笑い出した。2人ともヒドスギル！

「もー！　見てってたのんでないのにー！　なんで笑うの！」

「あはは。あ、ごめん花。でもこれは最高すぎるでしょ？　私の周りにもこれだけの絵を描ける人はいないかも」

私に原稿用紙を返すお姉ちゃん。

「ねえ。ちなみに、これは何の絵なの？」

「これは……。女子高生だけど」

「なに～！　女子高生だと！　天変地異だ！　地殻変動だ！　お腹と背中がくっつくぞ！　がははっ」

「意味わかんないよお兄ちゃん！」

「いや、私もその発想はなかった……ぷっ！」

「お姉ちゃん！」

2人もひどすぎるってば！

「ちょっと、皆でなに騒いでるの？」

「お母さん……」

「ちょっと！　花が泣きそうじゃない！　また2人して花をいじめてたんでしょ？　こらっ！」

「ちがうちがう！　母さんこれ見て」

「見てみてお母さん」

「やだ！　やめてよ～」

「んー。どれどれ？　は、ははは！　なにこの頭から花が生えてる

おじさん！　あははっ！」

「お母さん！」

ひどい！　花が生えてるおじさんってなに？　一生懸命描いたのに！

「あはは、お腹イタイっ。で、これはなんなの？」

「母さん。笑えるからって言っちゃいけないことを言いましたね？」

「さすがに、私もそう思ったけど、声には出さなかったけど？　それ、花が描いた女子高生だって」

「じょ……、ははは！　やだ、花ちゃん面白すぎるわ～！　あははっ」

「もー！　みんなひどい！　出て行ってー！」

お母さんから原稿用紙を取り返すとそう叫んだ。

「1番ひどいのは母さんだろう？」

「そうそう、私あそこまで言ってないし……。おじさん……ぷっ」

「言ってる！　お姉ちゃんも言ってる！」

「ぷっ。くく……。いや、違うわよ花。きっと空耳だから、忘れなさい～」

「お姉ちゃん！」

「おーい？　皆どうしたの？」

「あっ！　お父さん！」

ぼさぼさ頭をかきかきしながらお父さんが私の部屋をのぞきこんできた。

私はいちもくさんにお父さんのそばに駆け寄った。

「お父さん、みんなひどいんだよ！　私の絵を見て笑うの！」

「おや、ソレはひどいね？　どうしてかな？」

「これを描いたの。女子高生な女の子。今までで1番可愛く描けたと思ったのに……皆が笑うから」

「なんで笑ったの？」

お父さんが私の後ろにいる皆に聞いた。

「え、だってさ」

「ぷっ、くく」

「ハジメちゃん。これは傑作よ本当に」

みんながおもいおもいに笑い出す。もー。なんて人達なんだろ！

「どーれ？　お父さんにも見せてくれるかな？」

「うん」

原稿用紙をお父さんに渡す。

「おー、これは。うん、とっても可愛いね」

お父さんがニッコリ笑う。

「そうでしょ！　よかった～。やっぱりお父さんはわかってる！」

「頑張って描いたね」

頭をなでてくれた。

後ろから、えー。と抗議の声がする。

「やっぱり父さんは花に甘いな。アレのどこが可愛いになる？　頭から花が生えてるおじさんが」

「甘いんじゃなくて、美的感覚が一緒なんでしょ、きっと」

「ハジメちゃんが花ちゃんの頭なでてる～、可愛い～」

「ふーんだ。いいんだもん！　お父さんが褒めてくれたから。それよりまだ作業中なんだから出て行ってよ！」

そう言って、みんなを部屋から追い出す。

お父さんには笑顔で手を振ってドアを閉めた。

「よし、もう1枚描こう」

私は原稿用紙を抱きしめて、もう一度見直すと机に戻った。

私は立花花（たちばなはな）。中学1年生。将来の夢は漫画家です！

「ねえ？　さっき、もう1枚書くって花言ってなかった？」

「哀れ妹よ。自分の画力の破壊力をまだ理解していない」

「ねえ、ハジメちゃん。花の絵のどこが可愛かったの？」

「あー。だって、お花が描いてあったでしょ？　可愛かったな～」

「「「え？」」」

「ちょっとちょっと！　ハジメちゃん？　おじさんの頭から生えていたお花が可愛いって思ったってこと？」

「そうだけど？　あ、ごめん。僕作業の途中だから戻るね。ご飯になったら教えて～」

「「「……」」」

「俺はあの人が1番黒いって思うのだが」

「私も、あの人が1番ひどいと思う」

「お母さんも。いや、お母さんはハジメちゃんが大好きだけど♪」

結局、ハジメが本当のところ、花の絵を見てどう思ったかは謎のままである。

その日、花がもう1枚描いたイラストは牛から何かがふき出したようなもので、ちなみにペガサスだったらしい。

ごしょうかい

ご覧くださいまして、ありがとうございます。

＊ご注意（？）＊

この作品には「先輩といたいけな後輩」というお話に出てきたキャラクターがちらほら登場するのですが、設定が違ったりとキャラクターの様子がちょっと変わっております。年齢や性格がかなり変わってしまっているキャラクターもいます……。主人公キャラなどとくに……。

ですので！　アッチはアッチ。コッチはコッチ。というように楽しんでいただけますと幸いです。よろしくお願いいたします。

【立花家の紹介】

○立花ハジメ（たちばなはじめ）

お父さん。身長１６０センチあるか微妙……。ちょっと長めの黒い髪。

職業は科学者。お家にある研究室で毎日怪しげな研究（？）をしている。

見た目がとっても可愛らしく、いつも学生かと思われてしまう。メガネをかけてる。

性格は基本おっとりしていて優しいが、時々突拍子もない事をして家族をびっくりさせている。

マイブームはテトリス。だがとても弱い。

○立花恵（たちばなめぐみ）
お母さん。身長１７１センチ。腰くらいまでのふわふわウェーブの明るめの髪
職業はモデル。でも最近はほとんど専業主婦。すらっとしていて、とってもキレイで美人。旦那さまのことが大好きでしょっちゅう抱きついている。大雑把な性格でお掃除がニガテ。
マイブームはヨガ。でもすぐ飽きちゃう。

○立花希美香（たちばなきみか）
長女。高校２年生。身長１６３センチ。ストレートロングでちょっと茶色ぽい髪。
女子高で生徒会長をしている。お父さんに似て頭が良く、お母さんに似てキレイである。
でも、少々腐女子な傾向が……。
マイブームは乙女ゲー。クーデレキャラに萌えている。

○立花洋（たちばなよう）
長男。高校１年生。身長１７２センチ。ちょっとウェーブしてる黒髪。
かなり頭が良いし、そこそこカッコイイのだが、とんでもないナルシストで自分大好き。
変なポーズをとったりしゃべり方が変だったり、性格が超個性的。
たまにメガネだけどダテである。
マイブームはギャルゲー。ツンデレ大好き。

○立花花（たちばなはな）

次女。中学1年生。身長１４８センチ。ストレートで短めの黒髪。立花家の末っ子ちゃん。将来の夢は漫画家。だけど、絵がとっても芸術的（！）で家族にいつも笑われている。でもめげずに頑張っている。部活は漫画部がなかったので家庭科部に入部。お父さんのせいで可愛そうな世界に足をつっこんでしまった、この作品の主人公。愛され体質。マイブームは素敵な作家さんのイラスト集を見ること。カラーイラストにも挑戦したいと思っているけど色鉛筆しか持ってない。

ごしょうかい（後書き）

まったり更新していきたいと思っていますのでよろしくお願いします！

ぷろろーぐ

「花、お茶」

「はーい」

「花ちゃん悪いっ、こっちきて……」

「わー！　どうしたのシモンさん！　顔色悪いよ！」

「ちょっと徹夜で……」

「大変っ」

「花ちゃん～。ボクも～」

「エンシさんは後でー」

「え～」

「おい花、俺のお茶」

「あっ、ちょっとまって」

「花ちゃん、悪い、限界……」

バタン。

「わ！　シモンさん！」

「花ちゃ～ん、それはいいからこっち～」

「おい俺のお茶！」

「もー！　ちょっと待ってってば～！」

立花花。普通の中学生。のはずが……。少々厄介ごとに巻き込まれています。

きっかけ

「花～、お土産だよ～」

「え！」

お父さんが海外旅行から帰ってきた。

たまにふら～と、フランスに行ってくる～とか、イタリアに行ってくる～とか言って、勝手にどこかに行ってしまうお父さん。先月も、最近見かけないけど研究室にこもってるのかな？　って思ったらハワイのお土産ですよ～とか言って大きなロブスターを2匹買ってきたし。今回も行き先を言わないでどこかに行ってたみたいなんだけど、お土産があるからおいで～と言われてリビングに行くと、そこには知らない3人の男の人がいた。

「お土産って何？　この人達は誰？」

「だから、花にお土産です。なんと吸血鬼さんだよ～」

「へ？」

意味がわからない……。まるで今日は良いお天気だね～みたいなノリでお父さん今凄いこと言ったよ？

「とりあえず、花も座って」

「は、はい……」

よくわからないけど……。とりあえず、お父さんの隣に座る。目

の前には知らない男の人が……。

「えーと、右からマサトさん。次がシモンさん。続いてエンシさんです。皆様、この子が私の娘の花です」

よくわからないけど自己紹介されたみたい。えーと、どうしたらいいのかな私。

「お、お父さん？」

「ん？　花もご挨拶したら」

「あ、はっはい。あの、立花花です。こんにちは……」

「こんにちは花ちゃん」

「こんにちは～」

「どうも」

えーと、最初に挨拶してくれた人がシモンさん？　金髪でちょっと長めなくせっ毛な感じな髪を軽くむすんでる。笑顔で人がよさそうな感じ……かな。次がエンシさん？　黒でストレートなとっても長い髪。ほんわかしてそう？　しゃべり方とか優しい感じかも……。最後がマサトさん？　1番長いとこが肩につくくらいの黒でサラサラな髪。目元がキリっとしてて、雰囲気もキリっとしてて、見てると他の2人よりなんか緊張しちゃうかも……。

「花？　3人がね、お父さんの研究に協力してくれるんだよ」

「え、研究？」

「そうだよ。お父さん科学者だからね。吸血鬼なんて非科学的な存在さんに出会えるなんてラッキーだったよ～。いろいろ調べさせてもらおうと思ってね。３人も日本に興味があったようだし。あっ、もちろんタダでってわけじゃないよ？　とりあえず、うちの空いてる家を住居に使ってもらって、もちろん食事も提供することになってね～」

よくわからないけど、お父さん嬉しそうだな。でも……。

「ねー、お父さん。本当に吸血鬼さんなの？」

ちらっと３人を見る。マサトさん以外はニコニコ顔のままだ。

「そうだよ花。もちろん花は吸血鬼さんに会ったのは初めてだから、なかなか信じられないと思うけど」

「うん、初めて会った」

「お父さんも最初は冗談かな？　って思ったんだけどね～。これがまた本物さんでビックリだよね～」

ははっ、と笑う。

「なんで本物さんってわかったの？」

「あぁ、それはね」

お父さんのメガネの奥がきらっと光った。

「お父さん、3人に食べられちゃったからさ」
「たべられ……。え、えええええー！」
お父さん食べられちゃったの！　吸血鬼さんに？　って、もしかして！
「ち、ちちち、血ー！」
「はは。花、落ち着きなさい」
「だって、お父さん血を、血を！」
「花、お父さんは血は吸われてないよ？」
「え？」
違うの？　なんで？　吸血鬼さんのお食事って血だよね？
「花ちゃん、違うんだよ？　俺たちは血は吸わないんだよ」
そう言ったのはシモンさんだった。
「もちろん血も吸ってもいいんだけど、俺達の一族は最近はあまり吸わないね。それより俺達は人のエネルギーを食べるんだよ」
エネルギー？
「ちょっとわかり辛いかな。言葉にするのが難しいんだけど……。

人にはそれぞれ、まとっているオーラみたいなのがあって。生命エネルギーというか。うーん、花ちゃんには難しいかな？」

「え、と。なんとなくは……」

「そう？　それで、俺達はそれをいただくんだ。さっき言った通り、血を吸うのは事情があって最近はしていないんだ。なんかごめんね、吸血鬼っぽくなくて……」

「そうなんですか……」

「でもね、エネルギーをいただく人はどんな人でもいいってわけじゃないんだよ。食事だから、俺達も好みというか相性があってね」

これがとても厄介なんだと苦笑いするシモンさん。

「ただ血を吸っていればよかった時と違ってね、こればかりは本当……。俺達もなかなか合う人と出会えなくて困っていたら、いいタイミングでハジメさんに会って」

「お父さんと？」

「そう。ハジメさんのエネルギーは俺達にぴったりの物でね」

そう言うシモンさんはとってもいい笑顔。

「じゃあ、お父さんがご飯なの？」

「違うよ～」

「え？」

「花がご飯です」

え？

「花がご飯ってなにお父さん？」

「文字通り、花がご飯」

お父さんが何が問題があるかな？　って顔で私を見ながら首をかしげた。え？　問題ないの？

「ええええー！　お父さんどういう」

「だから、花が3人のご飯。今日から花が3人の面倒をみるんだよ～。よかったね～」

「え！　よ、よ、よくないよー！」

「まあ、いちを説明すると。お父さんがご飯になれば研究に協力するって言われたんだけど、やっぱりお父さんには恵さんがいるでしょ？　さすがに3人の吸血鬼さんのご飯になるのは恵さんに悪いから……。それだったら、花は僕にそっくりだからきっと3人も満足できるかな～って思ってね。うん、そうしたらドンピシャだよ花。なんとお父さんより花の方が美味しいって！　よかったね花、吸血鬼さんのお友達ができて。しかも3人もだよ。こんな経験なかなかできないよね～」

ははっ、と嬉しそうに笑うお父さん。ちょっと、ちょっと待って！

「お父さん、勝手だよ！　どうして、私が」

「花……、お父さんのお願い聞いてくれないの？」

うるうるお目目で見上げてくるお父さん。うぅ。

お父さんは、私のお父さんなのに、なぜか私より可愛い顔をしている。身長も低いし、凄く可愛い。お父さんは自分のお願いが通らないときはかならずこうやって、可愛い顔をしてうるうるお目目で見上げてくるんだ。ヒドイ！　そんな顔されたら……。

「って！　いやだよ、やっぱりムリだよお父さん！」

「やだやだ！　花お願い～」

そう言って今度は抱きついてきた。もー！　お父さん！

「やだやだ言いたいのは私なのに～！」

「花ちゃん、大丈夫だよ。食事と言っても花ちゃんは俺達のそばにいてくれればいいだけだから」

「え？」

そう言ってシモンさんが優しそうに話しかけてきた。

「俺達とこうやって同じ部屋にいてくれるだけでいいんだよ。それだけでもう食事を取ってることになるんだ」

「そう……なんですか？」

そんなことでいいの？

「そう。でも、すごく消耗してる時とかは隣に座ってくれたり、手を繋いでくれたりすると嬉しいけど……」

て、手を繋ぐ？

「む、ムリ！　そんなの」

「花、ね、お願い？　お父さんの一生のお願い」

そう言ってウインクする。

「いや！　やだー！」

その後、何度も反抗を試みたけど、結局かなり無理やり吸血鬼さんのご飯になることになってしまった私。お父さんのせいで、普通の私の人生はちょっとズレた方向に行ってしまった。

それは私が小学４年生の時のお話。

それから時は経ち、私は中学１年生になった。

でも、私はまだ吸血鬼さんのご飯のままです……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1444z/

わたしが吸血鬼のごはん！

2011年12月5日19時57分発行